

リ久シ、家園ニ可植、子ヲマケバヨク生ズ、深紅ニ白キ飛入アルハ葉大ナリ、

〔和漢三才圖會八十四〕山茶花 左牟佐久波、字之音也、誤如曰茶山花○中

按山茶花其樹葉花實與海石榴ツハキ同而小、其葉如茶葉、其實圓長形如梨而有微毛、可小梅大、老則裂中有核、三四顆、榨油多於海石榴、凡種子者必不佳、可接枝、凡山茶花冬爲盛、海石榴花春爲盛、遠州有山、茶花大木、高三尺餘、高三丈餘、

〔古今要覽稿 草木〕さゞんくは 山茶華

さゞんくははこれ山茶華の字音にして、卽和漢通名なり、その一名を耐冬華、一名海紅華、一名玉茗華、一名茶梅といふ、今多く人家に植るものは、梅の風、口粉紅根岸江、三國紅さめが井、雪の山、同じくその瓣小なるもの、及び醉西施、えんくの房、薄紅の大瓣小瓣茶ばななどのたぐひ也、いはゆる根岸紅、三國紅は卽海紅華にて、いはゆる薄紅のものは玉茗華、一名淺紅山茶也、其外數十種ありといへども、漢名のいまだ詳かならざるもの極めて多し、華の形はすべて茶の華に似て、最大にして單瓣のもの多く、重瓣のもの少なし、本邦にては、その花八月の末九月の比より咲そめて、十一月の半に至り、西土にては十月より咲そめて年をへて二月の比までも咲つゞくよし、蓋し風土の異なるによりてなるべし、其葉の狀又茶の葉に似て、大小の異同ありといへども、皆深綠色にして、霜雪を経て凋まざる事、なを茶葉の如し、扱大隅國都の城といふ所にては、家ごとに此樹五六十、或は七八十を植置て、その芽ざしを摘て茶に製し、以て日用のたすけとす、その香氣芬芳常の茶よりも勝れるによりて、年若き女の神まうでなどする時は、まるぐけの帶を結び、手巾ナメグひきかぶりて、此茶を製せしを物につゝみて、香袋に代用ゆるも、此もの、其地に生ずるは至て上品にて、殊に香氣の勝れたるによりてのならば、はしなるもいとめづらし、且其實を採て油となすに、海石榴よりもその油多く出て、それを以て物をゆびき熟し、食ふに、香氣ありて、味また麻油